

説教題：「OIC 信仰声明、第 10 項：私たちは、教義と生活において純潔を保つことを信じます」

鍵となる聖句：ユダの手紙 3-4 – 「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。⁴というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。」
ユダの手紙 21-23 – 「神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。²²疑いを抱く人々をあわれみ、²³火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ、肉によって汚されたその下着さえも忌みきらいなさい。」

皆さん、おはようございます。また皆さんにお会いできて嬉しいです。今日は、大阪インターナショナルチャーチの信仰声明に関する説教シリーズの締めくくりとして、声明の最後の項である第 10 項を取り上げます。前にもお話ししたように、この説教シリーズを始めたのは、私たちがクリスチャンとして生活する上で、私たちが拠って立つ基本的で本質的な教義を思い起こすことが大切だと考えたからです。

第 10 項の信仰声明を読みましょう：

神の御言葉に従い、教えとその生活において、特に、すべての偶像礼拝との関わりにおいて、はっきりと教会の清さを保つ必要がある、と信じる。

ユダの手紙 3-4、ユダの手紙 21-23。

この言葉をもう一度見てみましょう。「我々は.....維持する必要性を.....信じる」必要性：この項に概説されている理想を維持しようと努めることが決定的に重要です。そうすることが救いを得る方法だというわけではありません。いや、それは救いへの道ではないのです。「教理と生活における目に見える教会の純粋さ」を維持することがこれほど重要なのは、第一に、私たちを見ている世界に対する証しとして.....そして第二に、教会が正しい教理と神としての生きざまを見失うことは危険だからです。もし私たちの教義が水増しされるなら、私たちのメッセージは力を失います。魂を救う力を失ってしまいます。教義が混同された教会は非常に多いです。例えば、中世の時代には、慣習化された教会が奇妙な教義や助けにならない宗教的慣習を推進し、福音を不明瞭にしました。もう一つの例は、現代のものです。最近の多くの教会は、その神学においてリベラルになり、信仰の基本的な教義を否定しています。三位一体の神、キリストの贖いの犠牲、キリストの復活。このようなりベラルな教会を見ていると、基本的な教義を否定しているにもかかわらず、自分たちをキリスト教会と呼びたがっている人々を見て驚くこ

とがあります。それはいけません。キリストの名を名乗りたいのなら、聖書に概説されている基本教義に立脚しなければなりません。私たちの教会では、健全な教義を維持していることを確認する必要があります。

中世教会とプロテスタント宗教改革に話を戻しましょう。プロテスタントの宗教改革者たちは、教会を神の言葉である聖書に基づいた原則に立ち返らせようとなりました。彼らは正しい教義を概説し、何が真の救いの道であるかを明らかにしようとなりました（エペソ 2:8-9-救いは信仰による神の恵みによるものであり、行いによって達成されるものではない）。OICの信仰声明第10項が、私たちは「神の言葉による」でなければならぬと明確に指摘していることに注目してください。聖書こそが私たちの最高かつ最終的な権威です。このことは、プロテスタントの原理として知られるソラ・スクリプトゥラ（Soすなわち「聖書のみ」）に明記されています。聖書だけが私たちの権威であり、あらゆる教義とあらゆる実践のための最終的かつ最高の権威です。

第10項に戻りましょう。ユダの手紙の聖書の言及に注意を払いましょう。最初に何を語っているのかを読みましょう。

ユダの手紙 3-4 - 「愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生まれました。⁴というのは、ある人々が、ひそかに忍び込んで来たからです。彼らは、このようなさばきに会うと昔から前もってしるされている人々で、不敬虔な者であり、私たちの神の恵みを放縱に変えて、私たちの唯一の支配者であり主であるイエス・キリストを否定する人たちです。」

ユダが「私たちがともに受けている救い」について言及していることに注目してほしいです。彼は、救いはイエス・キリストにあるという信仰を彼と同じように共有するクリスチャンの共同体に向けて書いています。そして、これらのクリスチャンたちに、「聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう」と勧めています。熱心に争う。私たちは時に、キリスト教の教理を歪曲しようとする人々、つまり教会の外にも内にもいる人々に対して、真の教理を守らなければなりません。4節には、教会に「ある人々が」「ひそかに忍び込んできた」と書かれていることに注目してください。そのような人々はクリスチャンのように見えたのですが、歪んだ考えを口に始めたとき、自分たちが間違った道を歩んでいることを示しました。彼らの中には、見当違いのクリスチャンもいれば、完全に偽りの弟子（マタイ 7:15にあるように「羊の皮をかぶった狼」）もいます。このようなことが起こったとき、自然に消えて行くことはありません。それに対処しなければならなりません。ユダは、真の信仰のために熱心に争うようにと語っています。5年ほど前、私たちの牧師が、OICに参加している人の中に、「繁栄の福音」と呼ばれている考え方を広めている人がいることを知った時のことを覚えています。それは、すべてのクリスチャンが健康で経済的な祝福を享受することが神の御心であるという教えです。これは信仰を害する誤った福音です。私たちの牧師はその人に、その教えをここ

で広めるなど言わなければなりません。25年ほど前にも、モルモン教徒の男性がOICに参加し、人々を自分の教会に勧誘しようとしていたことがありました。私たちは彼に、自分のしていることを止め、二度と来ないように言わなければなりません。私たちは、新約聖書に概説され、私たちに受け継がれてきた真の信仰をもって、争わなければなりません。

ユダが真の信仰のために争うことについて語ったことに関連して、もう少し聖句を読みましょう。使徒パウロは同僚のテモテに、テモテへの手紙 第一 1章 3-4節で次のような指示を書き送りました。- 「私がマケドニヤに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、⁴果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。」

同じように、使徒パウロはもう一人の同僚であるテトスにも指示を与えています。テトスへの手紙 1章 5節を読みましょう。- 「私があなたをクレテに残したのは、あなたが残っている仕事の整理をし、また、私が指図したように、町ごとに長老たちを任命するためでした。」

6、7、8節で、パウロは長老の持つべき資質を挙げています。そして9節で、パウロはテトスに、長老がすべきことの一つを語っています。「教えにかなった信仰のことばを堅く守り、それによって、健全な教えをもって励ましたり、反対する人たちを正したりすることができるためです。」

健全な教理をもって励まし.....また、反対する人たちを正したりすること。

長老たちは、健全な教理とは何かを会衆に励まし（教え）、また教会に偽りの教理を持ち込もうとする者を正すことです。

これは、私たちの信仰声明の第10項が言わんとすることです:教義の純潔を保ち、生活の純潔を保つこと。私たちが維持しなければならない純粋な教義とは何でしょうか?聖書を信じるクリスチャンの間では、さまざまな教義について意見が分かれていることに気づきます。私はしばしばこの問いを考えてきました: 私たちクリスチャンが一致しなければならない絶対不可欠な教義、私たちが明確にしなければならない本質的な教義、私たちが維持するために最大限の努力をしなければならない教義とは何でしょうか?

まず第一に、私たちは救いの道を正しく理解し、実践しなければなりません。もし私たちが救いの道を正しく理解していなければ、私たちが行う他のすべてのことは何の役にも立ちません。そして第二の教義もまた極めて重要であり、おそらく最初にこの教義を述べるべきだったかもしれません。神とは誰なのか、キリストとは誰なのかを正しい理解を待たなければなりません。もしあなたが正しい神に従っていないのなら、創造主との正しい関わり方を見つけることはほとんどできません。

救いはキリストを信じる信仰による神の恵みのみによるものであり、私たちが行う何らかの功徳的な行いによって得られるものではないというプロテスタントの強調点については、すでに何度か述べました。これはエペソ人への手紙2章8-9節などで教えられています。プロテスタントの宗教改革のきっかけとなったのは、16世紀にこの原則が再発見されたことでした。

[説教の中では読みません: エペソ人への手紙2:8-9 – 「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。⁹行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです。」

しかし、救いの道についての正しい理解をめぐる、もうひとつの論争の話をしましょう。それは1世紀に起こった論争で、使徒言行録に記されています。ここでは、ユダが私たちに勧めているように、パウロとバルナバがどのように「信仰のために熱心に争わなければならなかったか」を見ることができます。そして、この論争を解決するために教会の指導者たちがどのように団結したかを見ることになります。この物語の背景はこうです: アンテオケの教会は、アンテオケの町でも、後にキプロスやガラテヤといった場所でのパウロとバルナバの宣教活動を通じて、キリストの福音を異邦人に伝えることに大きな成功を収めていました。しかし、あるユダヤ人クリスチャンがユダヤからアンテオケに来たとき、論争が起こりました。

使徒の働き 15:1-2 – 「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。」と教えていた。

²そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。」

ユダヤ人クリスチャンの中には、旧約聖書の契約としてのしるしとしての割礼を含む、すべての指示にクリスチャンが従わなければならないと考える人たちがいました。事実、彼らが言っていたのは、クリスチャンになるためにはまずユダヤ人にならなければならないということでした。パウロとバルナバはこの見解に激しく反対しました。この論争を解決する方法は、エルサレムの教会指導者たちと会うことを決めました。

使徒の働き 15:3-11 – 「彼らは教会（アンテオケにある）の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人の改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。⁴エルサレムに着くと、彼らは教会と使徒たちと長老たちに迎えられ、神が彼らとともにいて行なわれたことを、みなに報告した。⁵しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである。」と言った。⁶そこで使徒たちと長老たちは、この問題を検討するために集まった。⁷激しい論争があつて後、ペテロが立ち上がって言った。「兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。⁸そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしを

し、⁹私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。¹⁰それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの先祖も私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。¹¹私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じていますが、あの人たちもそうなのです

ペテロは 10 節で、旧約聖書の律法の規定に従うことは、ユダヤ人の先祖にとっても大変なことであり、今の世代にとっても大変なことです。ペテロはこのメッセージの残りの部分で、神はユダヤ人クリスチャンと同じように、異邦人改宗者にも聖霊の賜物をお与えになったと述べています - 神は、その二つのグループの間に差別を作っておられません。11 節-私たちは皆、主イエスの恵みによって救われる。それが救いの道です。

もし、その章の続きを読むなら、使徒たちがアンテオケとその周辺地域の教会に宛てて手紙を書いていることがわかります。その手紙には、論争を引き起こしたエルサレムの人々は、自分たちの意見を述べただけで、教会の公式見解ではなかったと書かれています。私がこの話を気に入っているのは、教会が論争になった問題にどのように対処したかを示しているからだ。教会の指導者たちは一堂に会してその問題について議論し、論争の双方の意見に耳を傾け、そして結論を出しました。このような議論を通して、本質的な教義が明確になるのです。

実は、このモデルは教会の歴史の中で何度も繰り返されてきました。特に懸念される問題がある場合、教会指導者たちによる公会議が招集され、その問題を討議し、解決策を導き出すのです。こうした教会協議会の中で最も有名なもののひとつが、紀元 325 年にニカイア市で招集されたものです。これは第一回エキュメニカル公会議として知られています。「エキュメニカル」という言葉は「普遍的な」という意味で、ローマ帝国全土の司教たちが初めて教会会議に招かれたことを意味しています。その中で最も重要だったのは、アリウスという名のキリスト教司祭が引き起こした論争でした。この人物は、神の子イエス・キリストは父なる神のように永遠ではないという見解を広めていました。

アリウスは自分の見解を裏付ける聖書の箇所をいくつか持っており、彼の見解は人気を博していました。アリウスは諸教会の間の動揺させる原因となっていました。そして、ついに、この件を議論するために、ニカイア公会議が招集されました。一方は、この争点のもとであった、アリウスでした。その反対側は、アタナシウスでした。彼は、後にアレキサンドリアの司教となる有名な神学者でした。彼は、神の子であるイエス・キリストは父なる神とは、同等あり、父なる神と永遠に共存しなければならないと提唱しました。その公会議では当初、この二つの視点はいずれも少数派であり、出席した司教のほとんどは中間的な立場をとっていた。しかし結局、使徒言行録 15 章にあるような激しい議論の末、司教たちは、ついにキリストは御父とともに永遠の存在であること、そして決定的に重要なのは、キリストは御父と同質の存在であることに最終的に合意したことでした。同質。ギリシャ語では "homoousios" (ὁμοούσιος) または "homoousion" (ὁμοούσιον) と言い、英語では "consubstantial (共存)" と訳されます。父なる神と

子なる神は同じ立場を持っています。したがって、キリストの完全な神性はこの公会議で肯定されました。ニカイア信条は、キリスト教信仰の基本的な信条と父と子の関係を概説するために公会議で作成されました。信条の最後には、もともと聖霊についての簡単な言及がありました。コンスタンチノーブルで開かれた紀元 381 年の第二回エキュメニカル公会議では、聖霊に関する項目が拡大され、聖霊は神であり、父と子とは異なる人格であることが明確にされました。こうして、私たちは三位一体に関する決定的な声明を手に入れました： 父、子、聖霊。

私がこの話をしたのは2つの理由があります。ひとつは、初代教会がいかにして「信仰のために熱心に争い」、教会指導者たちの議論を通して教義を明らかにし、その結論を簡潔で素晴らしい神学的定式、すなわちニカイア信条として述べたかを、皆さんにお伝えしたかったからです。この話をする第二の理由は、私が皆さんと分かち合いたい個人的な証しイントロだからです。

私が子供の頃に、ルーテル派の日曜学校で受けた素晴らしい土台については、以前にもお話ししました。その後、大学時代にジョン・マッカーサーの教会に紹介され、彼の聖書を一節一節徹底的に説き明かす説教に感銘を受けました。彼は、説教する聖句のギリシャ語の構造や文化的背景を徹底的に掘り下げ、彼が取り上げる各節の意味を私たちに教えてくれました。私は彼から多くのことを学び、本当に感謝しています。当時の私は若く、熱狂的で理想主義的だった。私は、あらゆる面で徹底的に聖書的でありたい、聖書だけにこだわりたい、教派の背景や教会の伝統が私に与えるかもしれない、十分な根拠無し、あらゆる観念を取り除きたいと強く願っていました。

そして大学も半ばにさしかかり、夏休みにサンディエゴに帰省していたとき、2人の伝道者が私の家のドアをノックし、聖句を分かち合いたいと言ってきた。彼らが何を主張したいのかわからなかったが、読むようにと数冊の本を渡されたとき、その本がものみの塔、つまりエホバの証人が出版したものだとわかりました。これは三位一体を否定するグループでした。彼らは、数分前に述べたアリウスと同じ視点を持っています。彼らはキリストの神性を否定しています。三位一体という言葉は聖書には出てこないし、ホモウシオスという言葉も聖書には出てこない。もしこれらが聖書にない言葉なら、その背後にある神学的概念は正しくないのかもしれない。私はエホバの証人がくれた2冊の本を手に取り、読んでみました。これはおそらく、私の人生において危険な瞬間でした。この頃の私の考え方は、厳格に聖書的でありたい、古い伝統や不正確な神学的概念を排除したいというものでした。私は「単なる伝統」であるものはすべて捨て去りたいと強く願っていました。三位一体は単なる伝統であり、捨てるべきものなのかもしれません。

さて、それから数週間後、私は三位一体の背景についてかなり多くの調査を行い、その神学的見解に対する賛否両方の証拠を検討しました。私はすぐに、エホバの証人がある

聖句を解釈する方法が正確でないことに気づきました。しかし、最も感銘を受けたのは、セプトゥアギンタ（70 人訳）として知られる旧約聖書のギリシャ語訳を見たときでした。この翻訳が行われたのは紀元前 2 世紀から 3 世紀にかけてのことです。翻訳者たちは神の名前である "ヤハウエ" という言葉を、ギリシャ語で "主" を意味する "キュリオス" と訳しました。新約聖書の著者が旧約聖書を引用するとき、彼らは一般的にセプトゥアギンタから引用します.....そして、新約聖書の著者が "Kurios" という言葉を含むセプトゥアギンタの節を引用し、その節をイエスに当てはめるとき、彼らは実際、イエスをヤハウエと同一視していることに私は驚きました。そのことに気づいたとき、三位一体は聖書的ではないかもしれないという私の思索に終止符が打たれました。エホバの証人の分析には欠陥があります。実際、父なる神、子なる神、聖霊なる神を論じる聖書の記述全体を考慮するなら、三位一体はこれら 3 つの位格を表現する最良の方法となります。

この話をするのに多くの時間を費やしてしまったかもしれませんが、私が学んだこの重要な教訓を分かち合いたいと思いました。私は、神学的な問題と格闘し、本質的な教義を明らかにした前世代の神学者たちの仕事に感謝することを学びました。 私たちが使う神学的な言葉（「三位一体」や「ホモウシオス」など）は、聖書では明確に使われていないこともありますが、それでも聖句によって裏付けられる教理的真理を表しています。私たちプロテスタントは、「Sola Scriptura（聖書のみが教義と実践に関するすべての事柄の最終的な権威である）」という原則を信じていると言います。これは正しいです：聖書は教義上の問題に関する私たちの最終的な権威です。しかし、"Sola Scriptura" を "SOLO Scriptura"、つまり聖書のみ（のみ！）と解釈し、聖書に明示されていない記述を無視したり拒絶したりしてはいけません。聖書は私たちの至高の権威であるが、信仰の先達の働きを見過ごしたり、捨てたりすべきではないのです。プロテスタントの改革者たちがローマ教会の教義と実践を批判したとき、彼らはしばしば、聖アウグスティヌスや聖ヨハネ・クリソストムのようなさまざまな教父の著作に訴えました。そして彼らは、ニカイア信条の神学的定式と、カルケドン公会議（西暦 451 年）のキリストの 2 つの性質に関する宣言を支持しました。これらの重要な声明は時の試練に耐え、旧ローマ帝国の内外を問わず、キリスト教界全体に広く受け入れられてきました。これらは聖書の真理を要約したものであり、有益なものです。聖典と同じレベルにはないのですが、これらの記述は聖書に書かれていることと一致していると広く信じられています。

さて、OIC の信仰声明第 10 項には、「教義と生活において、目に見える教会の純潔」を維持することが必要であると私たちは信じていると書かれています。そして、私は教義、正しい教義についてかなりの時間を費やしてきました。現代のキリスト教界では、何が正しい教義なのかについて、数多くの意見の相違が見られます。聖書を信じるクリスチャンの間でさえ、バプテスマについて、霊的賜物について、どの様にしてイエス・キリストが将来再臨されるかについて、その他多くのトピックについて、見解の相違があります。私たちが守り抜かなければならない絶対不可欠な教義とは何でしょうか？私たちが交わりを保ち、互いを本物のクリスチャンとして認め合いながらも、意見が対立する

可能性のある、それほど重要ではない教義とは何でしょうか？確かに、最初の質問に対する答えの一部は、先に述べたとおりである。救いの教理を正しく理解することは不可欠です。そして、神の教義を正しく持つことも不可欠である：父、子、聖霊--それぞれ神であり、同じ実体を共有する3つの位格。しかし、先ほど述べたような他の教義については、聖書を信じる誠実なクリスチャンの間でも意見の相違があります。そして20代の頃、神が異なる教派の福音派クリスチャンを用い、祝福しておられることを知り、驚きました。私は特定の神学的問題について自分の見解を持っているが、異なる見解を持っている兄弟姉妹がいることも認識しています。彼らが真に本質的な教義に立っている限り、私はこれらの兄弟姉妹を受け入れます。

私がOICで最初に行った説教は2017年で、プロテスタント宗教改革の5原則というテーマでした。実は、その説教は昨年も繰り返した。2018年、私はOICで2回目と3回目の説教を行いました。2回目の説教は使徒信条について、3回目の説教はニケア信条についてでした。この2つの神学的定式は、私たちがクリスチャンとして守らなければならない最も本質的な教義のいくつかを表していると思います。私はこの2つの信条がとても好きなので、今日は皆さんのために暗唱したいと思います。

使徒信条

わたしは、天地の造り主（つくりぬし）、全能の父なる神を信じます。

わたしは、そのひとり子、わたしたちの主、イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、処女（おとめ）マリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府（よみ）にくだり、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父なる神の右に座しておられます。そこから来て、生きている者と死んでいる者とを審（さば）かれます。

わたしは、聖霊を信じます。聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活、永遠（えいえん）のいのちを信じます。アーメン
- 『日本聖公会祈祷書(1959年版)』より

ニカイア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）

我は唯一の神・全能の父・天地とすべて見ゆる物と見えざる物の造り主を信ず

我は唯一の主イエス＝キリストを信ず。主はよろず世の先に、父より生まれたるひとりの御子、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生まれ、父と一体なり。よろずのもの主によりて造られたり。主はわれら人類のため、また我らを救わんがために、天よりくだり、聖霊によりておとめマリヤより肉体を受け、人性をとり、我らのためにポンテオ＝ピラトのとき、十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にかないて三日目によみがえり、天に昇り、父の右に座したまえり。また栄光をもって再びきたり、生ける人と死ねる人をさばきたまわん。その国は終わることなし

我は聖霊を信ず。聖霊は命を与うる主、父と子よりいで、父と子とともに拝みあがめられ、預言者によりて語りたまひし主なり。我は使徒たちよりの唯一の聖公会を信ず。罪の赦しをうる唯一の洗礼を信認す。死にし人のよみがえりと来世の命をのぞむ

アーメン

- 『日本聖公会祈祷書(1959年版)』より

また、プロテスタント宗教改革の5原則を繰り返しておきましょう：

ソラ・スクリプトゥラ（「聖書のみによって」） - 聖書は、信仰と実践に関するすべての事柄について、私たちの最高かつ最終的な権威である。

ソラ・フィデ（「信仰のみによる」） - 私たちは、善い行いに基づいて義とされるのではなく、信仰のみによって義とされる。

ソラ・グラティア（「恵みのみによって」） - 救いは神の恵みのみによるものであり、人間の功績によるものではない。

ソルス・クリストゥス（「キリストのみによって」） - キリストは神と人との唯一の仲介者であり、他の誰によっても救いはない。

ソリ・デオ・グロリア（「神にのみ栄光を」） - すべての栄光は神のみに留保され、他のいかなる人物や存在にも与えられないべきではない。

私たちの教会の会則は、私たちがプロテスタント教会であることを示しています。私たちの教会の信仰声明は、典型的な福音派の信仰声明です。これが、私が OIC はプロテスタントと福音派の伝統に立つ教会であると言っている理由です。また、私たちは超教派の教会でもあります。当時はバプテスト、長老派、カリスマ派、その他の福音派クリスチャンも参加していましたので、私たちの歴史は超教派的で国際色豊かなものでした。

さて、今日の説教では教義について多くのことを述べました。もう一度、信仰声明の第10項を見てみましょう：

神の御言葉に従い、教えとその生活において、特に、すべての偶像礼拝との関わりにおいて、はっきりと教会の清さを保つ必要がある、と信じる。

「教理と生活における目に見える教会の純潔」生活の純潔、つまりクリスチャンのライフスタイルについて数分話をさせてください。そして、偶像礼拝について。この段落では、偶像礼拝について具体的に言及されています。私はヨハネの手紙第一を思い起こします。ヨハネがその素晴らしい手紙の中で最後に述べているのは、次のようなことです（第1ヨハネ 5:21）：「子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。」幼な子たちよ、偶像礼拝から身を守りなさい。私たちは、神ご自身と御子イエス・キリスト以外のものを拝まないようにしなければなりません。その理由は色々ありますが、まずは、神でないものを礼拝する時、命の無い偶像に自分が似て来ることでしょう（詩篇 115:8）。そして神の与えてくださるまことの命から離れることとなります。

人生の純粋さ 今日のメッセージを締めくくる前に、いくつかの聖句を紹介しましょう。

エペソ人への手紙 4:1-2 – 「さて、主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。²謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、」

私たちの生き方は、キリストの弟子としての召命に「ふさわしい」ものでなければなりません。私たちの生活は、キリストの人格を反映したものでなければなりません。周りの人々は私たちを見ています。私たちはキリストの愛と聖さを反映しているでしょうか？それとも、不平や不満を言ったり、嘘をついたり、盗んだりしているでしょうか？キリストの弟子であるという私の主張と一致するような積極的な証しとなるような、神を敬う生き方をすることが、私の日々の祈りです。

コロサイ人への手紙 1:10 – 「また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」

もう一度：キリストにふさわしく歩みなさい。キリストを喜ばせたいと願いなさい。実を結びなさい。神を知る知識を増やしなさい。

ピリピ人への手紙 1:27a – 「ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」

テサロニケ人への手紙 第一 2:11-12 – 「また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、¹²ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」

使徒パウロは何度も何度も、彼が奉仕してきたさまざまな教会のクリスチャンたちに、神の国の弟子として召してくださった神に誉れを与える生き方をするようにと懇願しています。

私の焦点を少し変えましょう。テサロニケ人への手紙 第一 4:3-5 を見ましょう – 「神のみこころは、あなたがたが聖くなることです。あなたがたが不品行を避け、⁴各自わきまえて、自分のからだ（器）を、聖く、また尊く保ち、⁵神を知らない異邦人のように情欲におぼれず、」

神の御心は.....私たちが聖別され、神を敬う生き方をすることです。そして、私たちが気をつけなければならないことの第一は、自分の体の使い方である。（4節の英語では「器」だが、日本語の新改訳聖書では「からだ」と訳されています。）新国際版（NIV）では、4節はこうなっています：あなたがたはそれぞれ、自分のからだを聖なるものと尊いものとの制御することを学ぶべきです。」

コリント人への手紙 第一 1 6:18-20 – 「不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行なう者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。¹⁹あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。²⁰あなたがたは、

代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」

私たちの体は "聖霊の宮" である。ここには聖霊が宿っています。なぜなら、キリストが私たちを救うために十字架で死なれたときに、神が買い取ってくださったからです。

私が若い頃、自分に厳しく、クリスチャンの道德に従って生きることができたのは、今回ご紹介する聖句のおかげです。この体は私のものではなく、神のものです。この体には聖霊が宿っているのだから、汚してはいけません。

聖なる、神を敬う生活を送るようにしましょう。あらゆる罪 - 不道德、嘘、盗み、貪欲、殺人、怒り、その他多くの罪 - を捨てることです。この世は、私たちを見えています。私たちの生活はイエスを反映したものでなければなりません。

今日のメッセージは、私の大好きな新約聖書の一節で締めくくろうと思います。ヤコブの手紙 1:27 - 「父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです

これは純粹で汚れのない宗教です：

社会で最も弱い立場にある人々に配慮すること。

そして清い生活を送ること。

社会で最も弱い立場にある人々の世話をすること。

そして清い生活を送ること。